

創立50周年記念事業 市民セミナー 基調講演要旨



「多様な緑とのつきあい方」

笠 康三郎（有限会社緑花計画 代表取締役）

北海道大学農学部 非常勤講師、有限会社コテージガーデン技術顧問、NPO法人ガーデンアイランド北海道 理事 等を務める。北彩都ガーデンや大雪森のガーデンの植栽設計など受賞歴多数。公園・緑地の計画・設計・維持管理、道路など土木空間の緑化・植生保全、自然環境保全や再生など、幅広く緑と関わっている。

1 はじめに

旭川市を緑にする会の50年、まことにおめでとうございます。

実は、私は30周年のときにお話をさせて頂いておりまして、それからちょうど20年たちました。私が北海道に来て51年になるのですが、その間ずっと緑に関わり続け、実施してきたことを振り返りながら、次の世代にどういうふうに繋げていけばいいのかを考えております。今日は、その辺りも含めて、お話をさせていただきたいと思います。

2 緑の空間も量から質への転換期

今、緑の空間は、量から質への転換期を迎えてます。

ちょうど私が北海道に来た50年前、オイルショックを経て、いわゆる高度成長が鈍化してきた時代でした。様々な世の中の仕組みががらがら変わったという、そういう時期に北海道に来て、緑に関わる仕事をすることになりました。

今年は、都市公園制度ができてから150年という節目

の年になります。しかし北海道の公園のはじまりは、それよりさらに2年古く、明治4(1871)年に当時の開拓使が、札幌の道庁の北側に「偕楽園」という公園を既に作っていました。これは、日本で一番古い公園といわれています。今年、北海道では、全道の都市公園をまとめた「北海道の公園150年」という本を発行し、造園学会北海道支部で記念のシンポジウムを先日開催したばかりです。シンポジウムの中でも、今まさに公園制度というものが転換期にあるという話がたくさん出てきました。

およそ50年前より国の施策として、高度経済成長期以降のひずみを緩和するように、街にどんどん緑、公園を増やしていくということを行っています。現在、全国平均で見てみると、1人当たり $10m^2$ ぐらいまで増えてきました。では旭川ではどうかというと、市民1人当たり $20m^2$ と、全国平均よりも倍ぐらいの公園があるのです。なお、全道平均では人口の少ない市町村が多いため約 $28m^2$ 、札幌では約 $12m^2$ です。

旭川というのは、非常に緑に恵まれている場所だということがよくわかります。地図を見ても、旭川の市街地を囲むように大規模な公園がきちんと配置されています。さらに幾筋もの河川が街中を流れていることから、どこにいても緑を感じができるのも大きな特徴です。札幌では都心には大通公園ぐらいしか緑がない、そういう街から比べると、旭川は本当に素晴らしい、おそらく日本でもこれだけ緑がくまなく街中にあるところは、多分ないんじゃないかなと思います。素晴らしい立地環境にあります。

このように、緑の空間の量としては充実した中、経済社会の成熟化と価値観の変化の中で、質的な充実にシフトするということが強く求められているのです。

その中で今特に話題になっているものが、2017年の法改正で新設された公園施設の公募設置型管理制度（Park-PFI）というものです。30年という期限はありますが、その空間に民間が例えばカフェを作ったり、ビルを併設しその中にいろんな店や施設を入れることで投資を回収し、公園空間の価値を高めていくという仕組みです。

市民の資産としての公園を「その場所をもっと使い切る」という方向に大きく舵を切っています。「共に育て共に作る」という行政と民間とのパートナーシップを伴うマネジメントの方法により、民間資本を入れて公園を運営し活性化していく方向に切り替わってきているのが現状です。

3 緑を活かす、緑をデザインする

私が緑に関わってきた中で、上川管内で行った仕事を三つご紹介します。

◇ファーム富田（中富良野町）

ファーム富田としてラベンダー栽培を始めた富田忠雄さんは、北海道の花観光を作り出した素晴らしい方でした。

私が富田さんに呼ばれて行ったのは、1991年の5月のことです。行ったときには、まだ「トラディショナルラベンダー畠」、花の種を採取する「彩りの畠」の部分しかありませんでした。富田家の下の方はすべて水田だったので、「水田をつぶして全部ラベンダーにしたい。」といきなり言われました。この場所をラベンダー畠を中心に、花と観光を成り立てる場所にしたいということでした。

話をしていく中で、「何かメインとなる施設を作り、その中で動線をうまく繋ぐようにしてはどうか」と言ったら、明日までに図面書いてくれないかということになり、ホテルで図面を書くことになりました。ポプリや香水などの作業場は既にあったのですが、別の場所にメイン施設を据えて、その間にラベンダー畠を作り、園内で動線を完結できるようにしたのです。

そうしたらこれはいいということで、なんと2年後には、今あるような空間ができました。ただ富田さんは、畠を区切るポプラ並木を切りたいといつてきました。日陰になるし、ポプラの根が畠に飛び出してラベンダーの生育に影響があるということでしたが、私は絶対に必要だと断りました。丘の方から見ると、左側の方に十勝岳がずっと立ち上がるのですが、右側に見せたくない看板や施設などが入り込んでくるので、どうしても隠したかったのです。



2003年天皇陛下（現上皇様）ご夫妻がファーム富田にいらして、そのときにこのポプラ並木をいいですねとおっしゃっていただいたそうです。また秋になると美しく黄葉し、韓国ドラマ「冬のソナタ」の風景に似ていると、この時期の観光客が激増し、ポプラ並木の存在を富田さんも納得されたのではないかと思っています。

◇大雪 森のガーデン（上川町）

次にご紹介するのは、大雪森のガーデン。これは高野ランドスケープの高野さんから、手伝ってくれというオファーがあって手がけたものです。高野さんは大学の先輩なのですが、一緒にする仕事はこれが初めてでした。計画としては上野ファームの上野さんがガーデンを作り、周囲の自然林を活かした空間を作りたいという話で、2011年5月に現場を見に行きました。上野さんのガーデンを予定していた場所は、エゾマツなどが主体の森の中で、これでは難しいと周りを見ると、手前にダケカンバやシラカンバが混じった明るい疎林があり、こちらに上野さんのガーデンを作ることにしました。

手前に上野さんが手がける「森の花園」という花を活かした華やかな空間、奥の方は、私が手がけた「森の迎賓館」という自然の樹木を生かした緑を楽しめる空間としました。「森の迎賓館」は地味かなと思ったら、毎年のお客さんのアンケート評価も悪くなく、こここの土地らしいという意見があり、この分担は非常によかったです。

あるとき「森の迎賓館」の園路で、子どもたちが寝転がっていました。「どうしたの？」と聞くと、「これきれいなんだ」と教えてくれました。子どもたちが見ていたのは梢を通して眺める青空や雲だったのです。私は、非常に衝撃を受けました。



私たちは、何か見せるためにいろんな物を作りすぎている。自然の森の姿そのもの、特にこの「森の迎賓館」のある場所は、エゾマツやダケカンバなど自然に生えてきた樹がそのままあるところなので、それ自体が素晴らしい存在なのだと子どもたちは感じ取っている。だから、なにかを植えてきれいに見せるということではなくて、「そのもの」を感じさせるような空間を作らなければならぬと改めて思い知らされました。

◇あさひかわ北彩都ガーデン(旭川市)

その翌年には、再び高野ランドスケープより、あさひかわ北彩都ガーデンの仕事も手伝ってほしいと依頼がありました。2012年2月に現場に行き、雪景色のハルニレとシロヤナギを見て、このガーデンの姿が見えたと思いました。この樹があるおかげで、このガーデンの姿が決まったというのが第一印象です。



さらに、このガーデンをどうデザインすればいいのかを検討する中で、旭川の優佳良織(ゆうからおり)からのインスピレーションを思い出したのです。

10年程前の1996年に国営滝野すずらん丘陵公園のカントリーガーデンを手がけた時、「フラワー タペストリー」という花壇を提案しました。優佳良織からヒントを得て、織物のような花壇を作りたいと思ったのです。

この場所は冬はゲレンデになるので、一年草と球根しか使えません。またベタ植えにすると、傾斜があるので土が流れてしまします。更に全面にチューリップを植えると、ものすごくたくさんの球根が必要になるのです。

そこで、1~1.5m幅の列状の花壇をバランスよく配置する

ことにより、その中でいろいろな花を楽しむこともできるし、全面に植えるよりも圧倒的に数が抑えられ、土が流れるかもしれません。この間に人が入って写真をとれば、たくさんの花の中で写真をとったような感じにもなります。

私としては、一番好きな風景だったのですが、8年目ぐらいのときに方針が変わり、今は全面ベタの花壇になってしまいました。

それが非常に心残りでした。優佳良織は旭川のものなので、このようなパターンで作れたらいいのではないかと提案し、生まれたのが駅南のガーデンでした。北彩都ガーデンのデザインには、そこにある既存樹を活かし、優佳良織にインスピレーションを得た花壇をつくるということがあったのです。



私のような造園の仕事をする者の強みは、植物の持つ力を最大限に發揮させること、時間を味方にし、時間と共に成長する素材を使いこなすことにあります。造園は、できたときが一番きれいなのではなく、5年、10年、20年と、年を重ねればどんどんよくなっています。最近造園業界に若い人があり入ってこないという現実がありますが、ちょっと考えればこんな夢のある仕事は他にはありません。そういう魅力をもっと伝えていかなければといつも思っています。

ところが最近、植物をうまく使える人が少なくなっています。公園などに植えられた木は、年と共にどんどん大きくなっていますが、そのまま放置すればモヤシのようになって死んだ空間になってしまいます。勇気を持ってそれを間引いていき、残した樹を大きく育てて新しい価値を創り出すことが今求められているのです。

4 緑とのかかわり方 守る 伝える 育てる

最後に、10年間続けている「札幌ハルニレプロジェクト」の話をいたします。

2014年に始まった札幌国際芸術祭の初代ディレクターが、今年亡くなられた音楽家の坂本龍一さんでした。坂本さんが掲げたこの芸術祭のテーマとして「札幌から始まる都市と自然の新しい関係」を問い合わせ直すということがありました。これは面白いなと私も思っていましたが、この前年に行われたイベントの一つとして、ワークショップを私にやってくれと依頼があったのです。それで他人事でなくなってしまい、必至で勉強をして臨みました。

札幌の街の成り立ちと、緑の関係、それから人の暮らしはどういうふうに関わってきたかということを、参加者と一緒に街を歩きながら、確認していくというフィールドワークを3回やったのです。

フィールドワークの初回に、テレビ塔の近くにある樹齢300年という巨大な一本のハルニレを見学しました。20～30年前までは、街なかにハルニレは結構あったのですが、都市化が進むと水位がどんどん下がり樹が弱ってきて、危険木だということで伐採され、これが最後の1本のようなものでした。これを見た参加者はびっくりし、ほとんどの方がこのような樹があったことすら知らなかったのです。

このハルニレは150年前に開拓使の島判官が本府建設の際に本陣を置いたところに生えているもので、このハルニレを見上げながら、島判官も松浦武四郎も、札幌の街をどうしようかと考えていたのではないかと想像されます。

ハルニレのあるところは市役所建替候補の場所でもあり、そのような樹であれば、もっと大事しなきゃならないと、ワークショップの参加者たちが「このハルニレの存在をもっと市民に知ってもらおう」と活動を始めました。これが「札幌ハルニレプロジェクト」です。そのキックオффフォーラムに参加した新聞記者の記事が話題を呼び、他の媒体にも波及し広がっていました。

まずこのハルニレの子孫を増やそうと、種を採取して苗作りを始めました。私はハルニレの種を播いたことはなかったのですが、6月に種を取って、秋までに25cmぐらいに育ちました。

夏休みに子どもたちとのワークショップを開催し、「ハルニレと生きる将来の姿」ということで、50年後の町の様子と自分たちの生活を想像しながら表現するということを

やりました。2チームに分かれて、畳一枚ほどもある張り絵で作ってくれたのですが、それぞれストーリーが全然違っていて、子どもたちの発想は面白いなと感心させられたのです。

このプロジェクトに興味を持った市立札幌大通高校の生徒が、ユネスコの国際的な文化交流事業の一環にこのハルニレを取りあげてくれ、5ヶ国の高校生達がこの小さなハルニレの苗を記念植樹しました。また、記事を見た私立静修高校の放送局からは、高文連出品作品にハルニレ取りあげたいと取材を受け、製作協力を行って大変面白い作品ができました。

このように、高校生ぐらいの人たちが、町の成り立ちや私たちの生活と緑の関係に興味を持つてくれるというのは、とても新鮮な経験でした。

ハルニレの苗木が80本くらいあり、市役所と協議して「さっぽろふるさとの森づくり」事業の一環で森づくりに取り組むという協定を締結し、郊外の緑地に植えることができました。

このような形で「札幌ハルニレプロジェクト」はちょうど10年目終わったところですが、こんなにこの活動が広がると思っていませんでした。子どもたち、高校生など若い人たちが、非常に共鳴してくれたことにも驚きました。この活動をずっと続けてこられたというのも、やっぱりこの「緑」というものに夢があるからではないでしょうか。

緑というものを軸にして、このような活動をやっていく時に「楽しさ」を持って広げることが大事なのではと思っています。情報を発信し、活動の内容を分かりやすく伝えるということも大事だと思います。ハルニレプロジェクトの例では、いろいろな媒体に取り上げられ、たくさんの人目に触れることができたことにより、長く活動を続けられたと感じました。

それでは、この会が、また次の30年、50年と発展していくことを願い、私の話を終わらせていただきたいと思います。最後になりますが、本当に素晴らしい50年を迎えることを、改めてお祝い申し上げます。